

平成20年度中学入試 第2回「国語」

1 説明文です。昨年刊行されました岩波ジュニア新書にあります左司祥子（さこんじ さちこ）の『哲学のことば』からの出題です。左司祥子はギリシャ哲学の研究を専門とする、大学の哲学科の教授です。

人間が誕生し、人生を終えて死んでいくという時の流れを川の流りに例えたものです。その大きなテーマを表現を変えながら何度も繰り返し説明されていますので、大まかに捉えていくと部分の理解にもつながっていくのではないかと考えます。

問一 傍線（1）「持ち時間を減らし、滅びに近づいていっているのです。」の箇所を言い換える問題です。「持ち時間」というのは、人間一人ひとりの生、命、人生などと呼ぶことのできるものです。「減らし」とは日々過ごしていくことです。「滅び」とは人間が死ぬことを表しています。これらの言葉を用いて20字以内で言い換えます。

問二 傍線（2）では、人と神の違いを捉えていきます。「彼の神性証明」とは、すなわちピュタゴラスが神であるという証明のことであり、人間ならばあり得ないこと、できるはずのないことをしたという証明です。15行目から16行目にかけて、「時間は滅びに一直線なのです。時間は返ってくることはなく、不可逆だ」とあり、さらに、川の流れ、時間の流れが説明され、31行目に「この止められないという性」、また、35行目から36行目「川にかかわるものたちが、早く進んで、とか、遅く流れて、とか祈っても、それに耳など貸すわけありません。」と続きます。そして傍線（2）の後、49行目から51行目「時間さえ、自分の思うままに、自分のところだけ遅くとか早くとか流れさせることができれば、同じ時間に、二か所にいるのは簡単なことです。」とありますので、これらのことから、人にはできないが、神にはできるという点を45字以内で説明します。この時、人と神の両方に触れ、対比させていることが必要です。

問三 空欄（3）に適する語を入れます。空欄の□に「みんなに通用する」とありますから、「意外な」や「特別の」は該当しません。「平凡」か非凡かが問われているものではありませんので正解は《エ》普通の になります。

問四 傍線（4）「退屈とか無我夢中とか」によって起こることを考えます。この箇所の□54行目から56行目にそのことが具体的に述べられています。「夢中でゲームしているときには、1時間も10分にしか感じられないでしょうし、退屈な授業のときは、30分が1時間にも思えます。」このことが私達にもたらすものはどのようなことかを考えますと、52行目から54行目の「時間はその個人個人のその時々々の状態に合わせ

て、早く口むね、と感じられたり、遅いじゃない、と思えたりするものだ」とありますので、ここを30字以内でまとめます。

問五 傍線(5)ではどのような時に祈りたくなるのかを考え、それを示す箇所を抜き出します。傍線(5)の直前に「こんなとき」とありますので、その前の部分を見ていきますと、69行目から74行目でどのようなときかの説明があり、69行目に「人が人生について考えるのは、事がうまく行かなかったときです。」とあります。ここを15字以内で《事がうまく行かなかったとき》と抜き出します。

問六 傍線(6)「時間の第二の意地悪」の説明として適切なものを選びます。時間の第一の意地悪は20行目の「時間の意地悪を感じるのはこのときでしょう。」とあります。「このとき」の前の部分、9行目から見ていきますと、19行目までに繰り返し述べられていることが、ウの内容になりますので《ウ》が正解です。アは「生きることに疲れた人々」、「消滅につながるものとしか見えなくなってしまうこと。」などは本文に書かれておりません。イは1ページの2行目にある円環的な時間観、これを述べたものですから誤りです。エは単なる「一直線」ではありませんし、「早さを変えることはできない」という点は、この後の主張になりますので該当しません。

問七 漢字の問題です。正しく楷書で書く習慣をつけておきましょう。

問八 本文の内容に合うものを選ぶ問題です。《ア》が正解ですが、このことは本文の最後の段落で明確に述べられております。イの「たとえ一刻でも自分にとって意味のあるものにしようと思い、流れに逆らい、もがき苦しむ。」は本文に書かれておりません。また、ウの「これを解決するには、時間に対する正しい認識が必要」という点も本文には書かれておりませんので不適當です。

2 物語文です。明治の文豪幸田露伴の娘、幸田文の小説『おとうと』からの出題です。厳格な父露伴と冷たい継母のもとで苦勞する幸田文自身の、実生活と重なる自伝小説ともいわれるものですが、姉と弟の心の交流がよく表れた場面です。

問一 おかずが「鯉節しかない」理由が問われています。冒頭に「けさも母は持病に悩まされて床を出て来なかった。」とあるように、病弱な義理の母に代わって家事の多くがげんの仕事になっていたという設定の中で話は進められます。43行目から47行目を読み進めていきますと、「母が翌朝の弁当のお菜を考えに入れ忘れればそれまでのだ。」とあります。すなわち、母が御用聞きに注文をし忘れたときは、今朝のように鯉節になってしまうことがわかりますので、ここを30字以内でまとめます。理由を聞

かれておりますので、文末は「～から。」で結びます。

問二 傍線(2)「いるもんか、濡れて行くよ。」といった碧郎の態度をげんはどのように思っているかを答えます。「いるもんか、濡れて行くよ。」と威勢よく飛び出したものの、げんの目に映った碧郎の態度は、35行目から36行目にある「強がりをいって」となります。ここを10字以内でまとめます。

問三 傍線(3)「今朝の傘のようなこと」について説明します。7行目から17行目を読み進めて行くと、古い傘は一度修繕したが、又骨が折れ、さらに又折れてしまい、そのままになっていると書かれています。そのため、碧郎は傘をささずに学校へ出かけてしまったわけです。以上のことを45字以内でまとめます。

問四 60行目、傍線(4)「はらはら」の表す心情を答えます。日常的に使う言葉です。《ウ》気をもんでいる。が正解です。

問五 傍線(5)「きのうにひきかえてきょうはいいことがありそうに思えてうれしい。」と言ってしまうげんの性格が問われています。57行目から62行目に、若さの持つこだわりやなさなどげんの性格が細かく描写されております。ここを40字以内でまとめます。

問六 I 傍線(6)「とぼとぼしている」の意味は70行目の「ねえさんがかわいそうだったんだよ。」という碧郎の言葉から考えます。《ア》意気消沈が正解です。

II 四字熟語の意味を答えます。これも日頃の学習が望まれます。

問七 傍線(7)「ねえさんがかわいそうとか、とぼとぼしているとか、よくもいえたものだ。」と思っているげんの、碧郎に対する気持ちを考えます。前日の雨の日のできごとを通して、「雨の中を前かがみに行く後ろ姿はみじめだった。」とげんは碧郎のことを思っています。また、76行目に「ちょこざいなことをいう碧郎である。」と書かれていますので、これらを50字以内でまとめます。

問八 本文の内容に合うものを選びます。アの「翌朝になって怒りがこみあげてきてみじめな気持ちになり」は本文の内容とは逆になります。ウの「反抗期に入った」は本文には書かれておりません。エの「成績も下がったことから学校生活に不安を感じ始め、」も「この生活を改善しなければと考え続けていた。」も本文には書かれておりません。本文の最後の場面から《イ》が正解であることがわかります。